別府市立図書館所蔵和本整理の記

佐藤嘉一

一

別府市立図書館は大正十一年（一九二二）、北小学校の一室を借りて誕生した歴史の古い図書館である。それだけに大正、昭和の初期に刊行された本も書庫内に保管されており、江戸時代に刊行の和本の類も多数残されている。ところが、この和本すべてがダンボール箱やプラスチック製の衣裳箱等に分類や系統等に関係なくぎっしりと詰め込まれていた。私が図書館に勤めた二年の間にこれを何とか整理して、少くともどの箱に何の書物が入っているかを明かにしたいと思ったが、僅かに着手したまま退職してしまった。その後、図書館で保管していた古文書の整理を入江秀利氏が行うことになり、その手伝いをはじめた。この作業のおおよそを終えてから、かねてより気になっていた和本の整理に当ることになった。

これから記すことは行ったことの宣伝などでは毛頭なく、作業の経過を記してこの方面の識者によって、整理や保管上の問題点を指摘していただきたいためである。また整理の過程で稀覯本やこれはと思う貴重書も見付けたので、その一部を紹介したが、図書館所蔵図書への関心を寄せてほしい願いもあるからである。なお、整理に際して終始便宜をはかってくれた平成八年当時の館長はじめ職員の方々や、和本収納箱をすぐ用意してくれた市教委社会教育課に対し謝意を表するものである。

二

整理の対象とした和本は、「和紙を用い、和風に仕立てた書物」（広辞苑）であり、和綴にした書物を指す。内容の面では和文で記したものだけでなく、漢籍または

唐本等漢文で記した和綴の本も含む。また和紙で和綴にしたものであれば、製板本はもちろん自筆本や写本の類も当然その対象とした。整理した総冊数は一四七二冊になったが、その中には旧刊本や古活字本は全く見出されず、殆どが江戸中期以降明治初年までの刊本であり、唐本では清代のものが大部分であった。

これらの和本は、どのような経路から図書館へ入ったかを見ると、概略次の三つになると思われる。

ア、「末松文庫」から寄贈されたもの。大部分は唐本。蔵書印を押している分だけで約二六〇冊。

イ、「古文書目録（特集号）」（別府市古文書史料集第一二集）に見える「日名子家文書」中の書冊（和綴）の形をとっているもので、二〇数冊がそれに当たる。

ウ、各所から寄託、寄贈されたもの。北小学校から図書館へ移管された四書や、北中の旧直江庄屋家から寄託されたと言われる「倭漢三才図会」（天、地、人の計九一冊　途中欠本あり）や、或いは「傷寒論」等が出たきたことから、漢方医からの寄贈かと思えるものもあり、各分野にわたっている。この分約一一九〇冊。

このうち、「末松文庫」とは元別府市長末松偕一郎氏が東京帝国大学法学部在学中から収集した図書も含む私設文庫の名で、現在の山の手中学校の西方に開設されていた。戦前にその中の漢籍の一部が寄贈された。

「末松文庫」の書籍には次の蔵書印が押されている。一つは篆書による「末松氏図書印」。もう一つは楷書で四行にした「末松丶一郎忞鴻岳樵史子逸購求熟読漢書洋書印」。いま一つは楷書三行で「末松丶一郎忞鴻岳東京遊学中購求図書之印」である。前の二個の印を押してある方が多く、三個とも押してある例は少ない。

「末松文庫」の概要は昭和八年版の「別府市誌」に掲載されているので、次にそれを挙げる。

創立者末松偕一郎氏は明治四十年頃、別府市当局者に勧説するに、図書館及温泉プール設置の必要を以てしたるも、財政その他の事情より其実現能はざりしより、大正十三年八月、通俗簡易図書館として本文庫を創設し、出入及閲覧を全然開放したるに、開館以来多数の図書盗難に罹れるを発見し、現下、出入閲覧に多少の検束を加へつゝあり。

「経費」　付属無料休憩所経費をあわせ年額五千円とす。

「図書冊数」　約三千冊

「閲覧人数」　年間一日平均六、七名

本人の篤志によって開設された私設図書館であるが、特に注目すべきは年額五千円の経費を文庫に当てていることである。人件費や無料休憩所の所要経費として仮に千円引き、残り四千円で本を購入したとする。丁度、昭和八年一〇月一〇日に岩波文庫として発売されたルソーの「人間不平等起原論」（本田喜代治訳）が二ツ星の定価四〇銭であった。平成九年にまた同一の訳者で復刊されたが、これは五二〇円である。本の価格の相異をそのまま物価変動の尺度にすることは無理であるが、それを承知で計算してみると年間五百万円以上、私設図書館で本を購入していたことになる。驚きとともに敬意の気持ちも湧いてくるところである。

以上、各方面の人々の好意によって図書館に届けられた和本であるから、埃に埋れ虫に食われるままにしておくのは到底忍びがたいことでもあった。

三

和本整理の手続きは、原則として市立図書館で行っている一般図書と同じにしたが、和本の特性に留意しながら進めたところもあるので、そのことをここでは記したい。

図書台帳は、和本の分だけ独立して一冊別建にした。他の図書と同じ台帳に記入していたのでは、何もかも混同してしまって、かえって、後日台帳を通して和本を調べる場合等に混乱を生じる恐れがあるからである。図書登録番号も1から初めて、末松文庫の「す」を頭につけて「す1」「す2」とした。ところが「末松文庫」と表示してあるダンボール箱より少しずつ取り出して逐次整理しているうちに、末松文庫寄贈の漢書とは系統を異にするものがかなり混在しているのに気付いた。これは何十冊と当っているうちに、末松文庫本来の本と他家からの本との相違が感じとして分ってきたことにもよる。それで台帳備考欄に、蔵書印あるものについては「末松氏蔵書印あり」の印を押すことにした。そしてきりのよいところで和本の「わ」を頭につけて、改めて「わ1」

「わ2」の番号を付して整理を加えた。最終的には「す」または「わ」の記号を付した和本が合計一四七二冊になった。これが整理登録した総冊数となるわけである。

整理の上で疑問に思いながら行ったのが分類の問題である。いろいろ考えたが、十進分類法によることにしたけれども、整理にとりかかる前に中野三敏氏の「書誌学談義　江戸の板本」(岩波書店一九九五年刊　以下「江戸の板本」と略記する。)を読んだ。そのなかに和本の分類の上で十進分類法によることについては、「本来無理なことを敢えて行っているという気がしてならないので、何かの機会に一度、和古書の分類法を徹底的に検討し直すことが必要でなかろうか。(中略)近代以前の生産物である和古書を敢えて十進分類法で処理しようとするのは、ここにも悪しき近代主義の影がちらついているように見えてならない。」と述べているとおりである。そこで和本にしても唐本にしても、十進分類法による分類に収まるものが数から見れば多いのだが、それでもなお収まり得ない和本があり、本当は収まり得ない少数の本も生きる分類を考えるのが最良と思っている。と言っても、現在の図書館では十進分類法に従っており、これに代る有力な分類法(特に和本の分類法)がなく、次善のものとして不本意ではあるがこれによることにした。また従来用いている方法との関連性や整合性をはかることも考慮した。なお、「日名子家文書」中より整理した二〇数冊については、すでに「古文書目録(特集号)」に記載されており、それから逸脱しないよう配慮した。そのため古文書を影印して書冊の形式にしている「日名子家文書」が０９０に分類しているので、それに合わせた。また、帳簿上の重複を避けるため、登録番号は新にはつけず、上記目録に記す「通し番号」をそのまま用いた。

蔵書印(登録番号、分類等の記入枠も設けた)を押すに当っては、後日、本格的専門的な整理をして、蔵書印中の記入事項の改変等を行うことがあるかも知れないから、その時に取替えが容易にできるよう、縦八センチ、横六センチに切った半紙に押印し、その上縁にいつでも剥ぎ取るように少しの糊をつけて貼ることにした。貼るのは原則として表紙裏の上部中央である。(ここで述べ

ている蔵書印と同型の印を、直接扉や本文一丁の所に押しているのが多いが、これは散逸を防ぐため何年か前に押したものだそうである。今回の場合、書籍に直接押印することは一切しなかった。篆書の蔵書印で朱肉で押したものならともかく、事務用も兼ねたゴム印で、しかも赤のスタンプ台を使って押しているなどは、本当に書籍を取り扱う者のすることではない。）

ラベルは表紙右下に貼ったが、その中段に記入するのは著者記号ではなく、すべて書名でとることにした。これは著者不明とされる書物も多いからである。また、ラベルの三段目には、後でも述べるが収納箱の番号を鉛筆で記した。これは真に本を愛する人が後日現われて、曝涼等をしてくれた後なども含めて、再び元の箱に収める場合、容易に収めやすくするためである。

和本の構成上見落せない一つに題簽がある。題簽の様式がその和本の特性を示すものともなるが、これが剥落していたり、半ば破れているものもかなりあった。「江戸の板本」にも記す通り、元来は薄い糊を二三か所つけて軽く上から押える程度であったから、すぐにとれてしまうことになった。この題簽のとれかけているのは、不易糊を薄くして軽く貼りつけた（糊を厚くすると表紙が反返ってしまう。）　江戸時代には、剥落したのを補うのに模刻や偽刻も行われたそうで、それほど重要な題簽であるから、表紙にそれがないからと言って、直に書名を記して貼布するなどは避け、他と紛らわしい分に限ってのみ、ごく少数題簽様にしてとどめることにした。

綴じ糸とその綴じ方も和本では見落せない分野で、「江戸の板本」では、補修する場合、古い綴じ糸はできるだけ残すようにと記している。長い間に糸の力もなくなり、ばらばらになったのもあって、止むを得ず全部新しい糸に取替えたのも少くない。（元の綴じ方に従って綴じたのは勿論で、すべて四つ目綴の本であった。なお所蔵和本のなかで高貴綴や麻の葉綴にしたものは数冊に過ぎない。）

四

整理も進み、全容がはっきりしてくるなかで気付いたが、全巻揃ったいわゆる完本は少なく、これが欠本なく

揃っていたらと惜しい思いを幾度かした。そのなかで全巻保存されていたものや、稀覯本、貴重本と思われるもののなかから郷土に関係ある著者も含めて二、三紹介したい。

敢　語

上記「二」に記す図書館へ収められた経緯を示すうちの「イ」に記載されている、日名子家旧蔵本の一冊で、「三浦梅園自筆」とある。ほぼ半紙本に近い大きさで、前表紙、裏表紙ともに藍色の行成表紙風の別の紙を付けてある。これは後に補ったもので、題簽は「敢語」と書き、下に二行に「火国後学　菅原正敬□」と記したそのことからも分かるとおりである。

本文は三十葉（板本なら三十丁となるが、自筆本により三十葉とした。）　最後は半葉。一葉十八行、これを袋綴じにしているので各半葉九行となり、各行すべて二十字である（最後の半葉は七行で終っている。）　所々に朱の書入れがあり、その一例を示すと、最初から三行目には（前後の文の繋がりに関係なく、その行二十字のみを記す。）

霊蓋各有所長矣霊者神之所為情慾意智也情欲

とあり、上から十二字目の「所」の上に朱印をつけ、右横に「霊」と記し、「情慾意智也」の「智」と「也」の間に朱線を入れ、左側に朱で「以運用営施」の記入がある。その他、墨書による詳細な書入れを行間や欄外に施している。また最後行は「敢語畢」と記している。本文に関しない部分であるが、最後の半葉には十行ほどにわたって末梢を示す筆の跡も見える。

なお右掲の「霊蓋…」の所を「梅園全集」（大正元年梅園会編）でみると、

霊蓋各有所長矣　霊者　神之霊　情欲意智　以運用営施　情欲　（圏点佐藤）

と、全集本では編者により読みやすく読点をつけているが、圏点の所が朱の書入れのあった箇所である。このことから推しても、図書館所蔵のものは「敢語」の草稿本と思われる。草稿本であるだけにこれを詳細に見ることで「敢語」の成立課程のみならず、梅園の思考課程も辿り得る貴重な書と言えるのではあるまいか。

蘭室雑抄

「敢語」と同じく日名子家旧蔵本の一冊で、脇蘭室自筆の手控である。中央に「〇蘭室蔵」と記した半紙を二折りにし、その半枚分（一頁）九行、一行二十桝を青刷りにした原稿用紙風の二十九枚綴じで成り立っている。

その最初の半枚の初行に「雑抄」と記し、三行目に「花見んと思ふ小舟に帆を阿げて吹きゆく風の好ろしく阿連かし」と記し、次の行に「韓退子　雲埋泰嶺家何在雪擁藍関馬不前」とあるように、その折々に目についた古歌、古詩文の抜粋、地名の抜書、考証等内容多岐にわたっている。八枚目の裏には、今日の親等図に似た「宗族親族図」と題した別紙を、また九枚目の表には、上段に「母党親属図」、下段には「内外兄弟図」と題した別紙を貼布している。

五車韻瑞

広辞苑に「明の凌稚隆の撰した経・史・子・集・賦に分けて熟語と出典とを明らかにした書。」とある。昭和二十三年に市費で購入した全一六〇巻揃（数巻合本で一冊となり、序、目録を含めて合計二十六冊となる。）書型は大本である。

「序、目録」の一冊を例にとると、九十七丁。ところどころ朱点を施している。なお、何れも開巻第一行の下に光源院と小印を押してある。二十六冊目（第一五一巻～第一六〇巻）の末尾には「萬治弐己亥末秋良辰　京寺町通本能寺前　八尾勘兵衛刊行」とあって万治二年（一六五九）に刊行されたものである。

全二十六冊揃っているのは上記のとおりだが、そのうちの一冊に湯飲みの大きさ位に腐蝕したようになっているのがある。これは何十年か前に、底の濡れた湯飲みを不用意に置き、あとそのまま放置しておいたための損傷と思われる。ちょっとした不注意とあとの始末を十分にしなかったためで、誠に残念なことである。

日本書紀　再刻

半紙本。全三十巻十五冊に収めた完本で、虫食いも少なく、図書館所蔵のうちでは美本の一つである。江戸時代の板本ではしばしば目にする江戸の須原屋茂兵衛より

出されている。

第三十巻の三十四丁目に「慶長十五庚戌仲夏念八／洛南野子三白誌」とあって、次に本書は当初安貞三年、兼頼によって写された由来を九行一三四字にわたって記している。「国書総目録」によると「慶長一五古活字版（復刻版を含む一五冊）」とあるから、右記のことと一致する。

十五冊本としては、寛文九年、寛政六年、享和三年、元治元年と四回刊行されているが、図書館所蔵の本書はそのうちのどれであるか、各冊を見返したけれども、それを示す記述は見出せなかった。

野山名霊集

高野山草創以来の事蹟を泰円が和文により記した五巻五冊の大本。完本で比較的美本である。

裏表紙の内側に「宝暦歳舎壬申南呂望日此刻以収／高野山青巌寺之経庫有」とあり、「装釘所高野山／経師伊右衛門」とあって、宝暦二年（一七五一）の刊行とわかる。巻之一に例をとれば、本文は四十丁。各丁半面十一行。両面にわたる挿絵六葉を収める。

朝夷巡嶋記

滝沢馬琴の作る読本中の代表作の一つ。全八編四十巻にわたるが、図書館では初編から五偏までを蔵している。（但し、三編第一巻、五編第五巻を欠く。）半紙本よりやや小さく、各巻第一行の題目の下に、幅一センチ、長さ二、五センチの大きさで、「神田」と横書、下に縦書で「三治」と刻した印がある。第二編巻之五に奥書があり、歌川豊広の挿絵で、大坂河内屋太助より文化十四年（一八一七）刊行と見える。

馬琴は挿絵を描く画家や板元ともしばしば衝突したことは有名である。河内屋太助とも喧嘩して筆を絶つことになるが、図書館所蔵のはすべてそれ以前のものである。（後は松亭金水が作り、葛飾為斎の絵となる。）

なお、第二編巻の一の序の余白を借りて「家伝神女湯一包代百銅　婦人諸病の良剤第一産前後ちの道に即効あり効能詳くは此書の初編に載せり」などと記し、他の薬も二、三掲げ「製薬并ニ弘処　江戸飯田町中坂下南側四

方みせ店の向　滝沢氏精製」とある。馬琴をモデルにした芥川龍之介の小説「戯作三昧」の最後のところに、子息の宗伯が丸薬をまろめるのに忙しいと述べた箇所があるが、芥川は家伝薬のこうした広告からヒントを得たのではあるまいか。何にしても江戸の板本には明治以後の活字本には見られない面白さが隠されており、そのよき一例をここに見る思いがする。

五

整理を終えた後の保管は、箱満杯に収めてはさらに傷むので、ゆったりした箱（ダンボール）に八分目位までにとどめて収めるようにしたいと考えた。それで大本（美濃本）と半紙本を何れの向きに組合わせても入るように幅二九センチ、奥行四二、五センチの箱を用意してもらった。これが揃ってからは収納の目安も立って、基本的には和本が図書館に寄贈された上記三つの経路別に分け、そのなかで同系統、同内容の和本は一つ箱に入れるようにした。そして末松文庫から入った本の箱には「末松文庫」と表示した（此の分八箱）。「日名子家文書」のなかの和本は「日名子家旧蔵和本等書目」と表示した（この分一箱）、各方面からの分は「収納和本等書目」と表示した（この分三十四箱）。表示の下段には収納した分の書名のすべてを記入した。

最後に目録を作成したが、著者名の判然としないのもあるため、「和本書名目録」（横書）として、次の例のようにした。

「管子全書〔重訂〕（序目）（六、一〇）（一三、一四）末1」

とあれば、角書の部分は〔　〕で現わし、第九巻、十巻を合冊しているので、それは（　）で示した。そして本書は「末松文庫」の一番の箱に収めているので「末1」とした。また、もう一つ例を挙げると、橘千蔭の「万葉集略解」の場合、

「万葉集略解　1、3上下、4上、5、6、7、収3」

としており、現有するのは巻一、巻三上下、巻四上、巻五、巻六、巻七の七冊であり、それは「収納等和本書目」の三番目の箱に収めているので「収3」としている如くである。類似の本は同じ箱に収めることから、「万葉梯」、「万葉集佳調」、「万葉集目安補正」は「収3」にありそ

れはすべて目録から分かるようにしている。　熱と埃と湿気は本の大敵であることは記すまでもない。整理に当っては埃を払い、通気にも心がけたが、何れも徹底したものではなかった。本来なら専門業者による完全な消毒を施し、東京世田谷の静嘉堂文庫のように、樟材に囲まれたなかに置くのが最善の方法であるが、それらは到底望み得ないことであろう。

整理中に唐辛子を挟んでいるのを二例ほどみた。勿論遠い過去に挟んだもののため干からびてしまっていたが、防虫として用いたものであろう。当時の所有者の心が伝わってくる思いがしたので、そのまま挟んである筈である。二度と刊行されないこのような和本を、せめて本を愛する人が丁寧に一冊一冊を扱って、年に一度は曝涼を、半歳毎には防虫防湿剤の入れかえを切望したいところである。

○　下図は、本文の「四」で紹介した「朝夷巡嶋記」全八編四十巻中の第四編巻之五の冒頭の部分である。

ここに見える修羅五郎経任は、厨川で乱を起し、本編の主人公朝夷三郎義秀（鎌倉の御家人和田義盛の子）と鎌倉から派遣された多賀光仲の軍に追われていた。朝夷と光仲の活躍で経任は平泉に包囲されるが、何としても切り抜けねばと経任も必死に戦う。この辺に関する記述である。

朝夷巡嶋記全傳第四編巻之五
東都　亭主人　編輯
雲中　鐵撮棒　曲
腰間る　栗柄刀
中編第二十九